

會澤正志齋父母の遺言状

【史料 I】「(与平書状)」會澤(安)家文書No.35- 1



哭の事かならず不被勤
通例之慎二而只々
身丈夫に御奉公被
相勤候事專一二候何分
此旨者急度申置候尤
及末期候而ハ執筆も
いかゝと前日認置候以上
三月廿八日認 与平
恒蔵殿

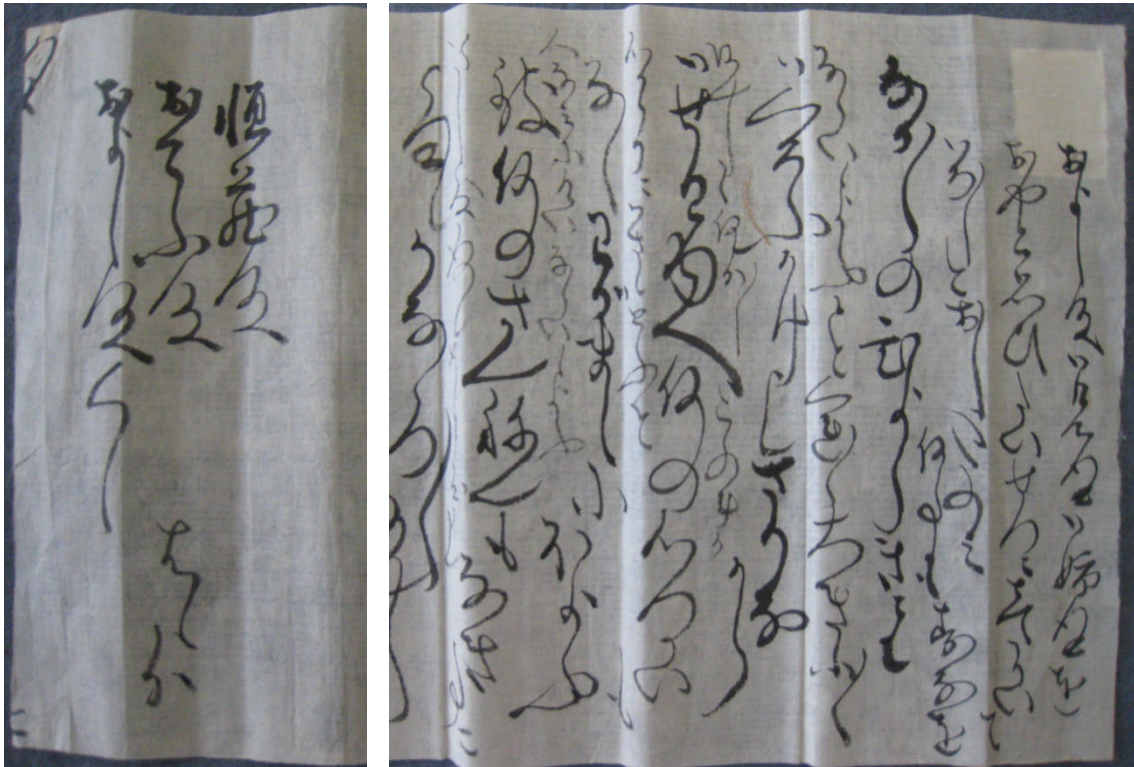
【史料 I】は、會澤正志齋の父會澤与平恭敬が子恒蔵（正志齋）へ宛てた遺言状です。父与平は、水戸藩の小吏で、この時大坂御蔵方勤めでした。江戸から任地大坂へ向かう途中、病を得、着任して半年後、この遺言状を書いた1ヶ月後の文化元年(1804)4月20日大坂で亡くなりました。58歳でした。江戸にいた恒蔵は父の危篤の報を受け、急ぎ大坂へ赴きますが看病の甲斐なく父を看取ることになります。この時恒蔵は23歳、前年の享和3年正月9日に金3両2人扶持の切符を賜り、定江戸史館物書に召し出されたばかりの貧窮の身で、葬祭を執り行うこともできず、父の亡骸は曾根崎の藤井寺に仮埋葬されました。

遺言状には自分の死に際して「哭の事」は行わず通例の慎みとすること、身丈夫に、ご奉公專一に相勤めることを書いています。「哭」というのは、中国式に人の死を悲しんで泣きさげぶ礼をいうようですが、与平はそれを望みませんでした。そして恒蔵の幼いときには自ら四書五経を教え、さらには藤田幽谷という師を選んでその門に通わせ、次第に頭角をあらわし史館物書となった我が子に望んだのは、ただただその体の丈夫で

あることと、ご奉公を専一として勤めることでした。そのささやかな願いにこそ、真に子を思う親の心を見て取ることができるのではないのでしょうか。

恒蔵にとって、父与平の亡骸を遠く大坂に仮埋葬したままであることは長年の気がかりでした。15年後の文政2年(1819)4月になってようやく水戸城西千波村の本法寺に改葬することができました。その時恒蔵は友人藤田東湖に墓碑銘を書くことを依頼します。東湖による墓碑銘「与平會澤君墓」には与平の人柄や働きぶりが叙述されていますが、その中に「君人と為り、沈毅寡言、識量あり」、「其の清廉自持す」の一節があり、与平が見識と度量を兼ね備え、物静かで、私欲のない人物であったことが偲ばれます。

【史料Ⅱ】「(のゑ書状)」會澤(安)家文書No.37-2



なかゝゝのひようきニも
御くるふかけ申候さりながら
御せわゆへ何の心つかい
なくわがまゝにほよふ
致何のさんねんもなき事に
被存候(後略)

(追而書)

およし殿御兄様御姉様を
おやと思ひたいせつニしたかいて
いろゝゝとおしたのミ何事もすなを
ならい候よふニとくれゝゝ大きにゝゝ
あんし候何よりゝゝこの斗か
心のこりニ御さ候とふそ
人なみにそいならい候よふ
くらし度存候めて度かしく

(中略)

恒蔵殿
おてふ殿
およし殿人々

はゝより

実は恒蔵の父が亡くなって2ヶ月足らずの文化元年6月2日、江戸で母のゑがあとを追うように亡くなります。46歳でした。当時母のゑの亡骸も江戸に仮埋葬され、水戸の本法寺に改葬されたのは、父与平の改葬がなった1年後の文政3年9月のことでした。恒蔵は母の墓碑銘もまた藤田東湖に依頼しました。それによれば母のゑは「温良慈恵」すなわち穏やかで素直、慈しみ深い人柄で、舅姑によく仕え、夫が仕事に専念できるよう家をよく守り、子に対してはきまったやり方をもって厳しく教えたとあります。恒蔵の幼いときには、怒ったり、恨んだり、争ったりすることをいさめ、読書に勉めることをすすめる、成長してからは、家が貧しくてもそれに煩わされることなく、志を学問に専念することができるよう家事をきりもりしたということです。

【史料Ⅱ】は母のゑの遺言状の一部です。恒蔵には、この時すでに嫁いだ梅という姉と長と芳という二人の妹がいました。母は兄妹仲良く暮らすことを遺言しますが、母にとって一番の心のこりは、最年少のお芳を十分にしつけてやれなかったことでした。「世の中のことばに、親はなけれど子は育つ」ということばはあるけれど、年長のふたりには、ことばをかけお芳をしつけてくれるよう、またお芳には御兄様御姉様を親と思ひ大切に従うよう言い残しています。死期せまる病状を覚悟し、自分の身の上よりも子どもたちの行く末を案じる文面からは、少禄といえども武家の女性としての教養と潔さが見て取れますが、何より母としての優しさが伝わってきます。

同じ年に父と母を相次いでなくした恒蔵は、師藤田幽谷にならって3年の喪に服します。実は与平とのゑの遺言状には、大坂と江戸のお互いに宛てたものがもう1通ずつあります。いずれも子どもたちの今後を相談するとともに離れている相手を思いやる文面です。恒蔵はこのような慈しみ深い両親の元に育ち、人格を形成し学問をなしていったのです。両親の思いを綴ったこの遺言状を恒蔵は大切に保管してきました。そしてまたその恒蔵の思いを引き継いできた會澤家の人々がいたからこそ、今日私たちがこの遺言状を目にすることができることも忘れてはならないでしょう。

折しも2月11日から3月20日の特別展「肖像画の魅力ー歴史を見つめた眼差しー」には會澤正志斎の肖像画も展示されます。會澤正志斎の厳しくも穏やかな眼差し、静謐な空気を漂わせる存在感をぜひご覧いただくとともに、その父母にも思いを馳せていただければと思います。

(史料学芸部歴史資料課 首席研究員 笹目 礼子)